

令和5年度第2回香川県立図書館協議会 議事録

日 時：令和6年3月19日（火） 13:30～15:00

場 所：香川県立図書館 研修室

出席者：池田委員、一原委員、梅澤委員、岡委員、河野委員、清國委員、黒川委員、山本委員

欠席者：川根委員、平田委員

傍聴者：なし

1. 開会

2. 館長挨拶

3. 議題

(1) 令和6年度予算（案）及び事業計画（案）について

- ・事務局から説明
- ・質疑
- ・承認

(2) 令和5年度運営状況について

- ・事務局から説明
- ・質疑
- ・承認

(3) 図書館評価について

- ・事務局から説明
- ・質疑
- ・承認

※ それぞれの議題に関する質疑については次のとおり

議題(1) 令和6年度予算(案)及び事業計画(案)について

委員：この予算案は既に県に承認されたものなのか、それともまだ案の段階で、今後変わるものなのか。

事務局：ほぼ確定したものである。

委員：それならよいが、せっかくやろうと思っていたことができなくなったりしないかと思ったので尋ねた。

予算案の大きい項目に対応する内訳、例えば「図書館資料充実に要する経費」は3,600万円あるが、その内訳にはどの事業や費用が相当するのか、表の右側に番号かなにか振れば中身がよく分かると思う。

事務局：次回から検討したい。ただ内訳が入り組んでいるので、却って見にくいところが生じるかも知れない。

委員：事業費は明確だが、管理運営費は少し難しいかもしれない。

事務局：例えば「移転開館30周年記念事業費」を管理運営費に計上している点は疑問に思われるだろう。予算作成の手法上そうなっているのだが、分かりやすくなるよう検討したい。

委員：資料3ページの「団体貸出」について尋ねるが、「100冊以内で1か月以内の貸出しを行う」とあるが、もし貸し出した本に個人の方から貸出希望があった場合でも、団体に対する1か月の貸出しが優先され、個人の方には「貸出中です」と答えるのか。

事務局：このことで利用者から不満を言われたケースは今のところない。児童資料については、昔から読み継がれている人気のある本は何冊か揃えているので、問題が生じていないのだと思う。

委員：資料4ページのエの巡回文庫について、「直島町、琴平町に1町300冊以内を3か月間貸し出す」とある。3か月は結構長いが、これも団体貸出と同じような対応になるのか。

事務局：巡回文庫には専用の本を配本しているので、個人の方から予約が入ることはない。

委員：予算が一律何パーセントと減額されているような時代に、来年度の予算が増額されたのはすごく珍しいことだと思うが、これは何か理由があるのか。「移転開館30周年記念事業」はもちろん例外的に認められた事業だろうが、「読書ボランティア支援に要する経費」についてもこれだけ拡大されている。それぞれ積算の根拠を示したうえで認められたものだろうが、このあたりについて、補足のコメントをいただきたい。

事務局：「読書ボランティア支援に要する経費」については、教育委員会の中で新規事業として位置づけられ増額が認められたものである。

「人件費」は所定の計算によるもので、図書館というよりも県全体のルールによる増額である。

「移転開館30周年記念事業」は30周年記念なので、令和6年度限りの事業である。

「図書館情報システムに要する経費」は、昨年12月にシステムを更新し、いろいろ機能が広がっているため、それによる経費の増が含まれている。

今回、新規事業と言えるものは「読書ボランティア支援に要する経費」と「移転開館30周年記念事業」ということになる。

委員：私は地元の図書館の協議会にも出席しているが、いつも話題になるのが、子どもや高校生向けの講座はあるのに、高齢者向けの講座があまりないということである。県立図書館の場合、資料2ページの「健やか生活応援講座」が高齢者向けの講座に該当するのか。

事務局：特別に高齢者向けとしている訳ではないが、結果として、この講座の参加者は年齢が高い。テーマも例えば認知症とか転倒防止など高齢者向けになっている。

議題(2)令和5年度運営状況について

委員：新しいサービスは昨年12月5日から始まっているということだが、どの程度利用があるのか。

事務局：例えばオンライン利用者登録申請は、12月からの3か月間の新規登録者560人のうち約40人、率にして7.5%ほどであった。また、スマートフォンの画面を利用した資料の貸出しは、この3か月間で170の方が利用するなど、徐々に利用が増えている状況である。

委員：オンラインで利用者登録をすると、貸出カードは送られてくるのか。

事務局：プラスチックの資料貸出カードはオンライン申請の方には発行しない。なお、オンライン申請の方のみならず、既にカードを持っている方もスマートフォンサイトにアクセスすると画面上に貸出カードを表示することができる。

委員：展示について、いろいろと工夫していて、面白いなと思っているが、何かが起こった時には、その都度臨時の展示とかを考えているか。

事務局：資料に掲載している以外に50冊程度のミニ資料展示を行っている。例えば先日、指揮者の小澤征爾氏が亡くなった時にも、著作やCDを集めて臨時の展示を行った。そういうトピック的なテーマでも展示をしている。

委員：時事的なテーマでの展示も図書館にはとても必要だと思う。

事務局：臨機応変にテーマを設定し展示を行っていきたい。

委員：資料10ページの「図書館コンサート」だが、今年度と来年度の演奏団体は同じなのか。

事務局：同じ団体である。

委員：高松市美術館のエントランスでのコンサートは非常に人気があって、利用申込みが増えているという話を聞いた。コンサートに来た人が美術展を見るという流れがある。図書館でもコンサートに来た人が図書館にも立ち寄りと思うので、これを今後増やしていけばどうか。別の団体も呼べばよいと思うが、そもそも何か理由があって同じ団体になっているのか。

事務局：最初をお願いして以来、団体の厚意で開催してもらっている。代表者の方は同じだが、出演メンバーは随時変わっている。

委員：音楽も発表の場がないので、愛好家は発表する場所を探している。だから、図書館も場所を貸してくれるということが口コミで広まれば、申込みも増えてくると思う。申込みが増えれば、図書館の利用者も増えるという好循環も考えられるので、もう少し工夫して、いろんな団体に演奏してもらえるようにすればよい。

委員：私もそう思う。県立なので、地域に固執しないで、いろんな方に参加してもらおうと、図書館の利用者も増えるのではないか。

委員：市美術館は団体を募集しているのか。

委員：いいえ、定期的にコンサートを開催していたら、口コミで広まり、うちの団体もやりたいので貸してほしいという流れになっていった。

委員：美術館として、どれだけの手間が掛かるのか。

委員：貸すだけだから。使用料も取らないし手間はかからないだろう。

委員：市美術館の場合はエントランスホールだが、県立図書館の場合は場所が視聴覚ホールになると思うので、利用の仕方が少し違うのではないか。市美術館のエントランスホールは無料で、そもそも貸出施設ではないところを使いたいという希望があって、何とか使えないかという議論の中で、市の主催で何回か機会を設けて何団体かにイベントをしてもらっているという状況なので、貸出施設を使うのと同じようには考えづらいと思う。

委員：県立図書館のエントランスも使えるのか。

事務局：施設の管理を担当する部署との調整になるが、音の出る催しは利用者の反応を考慮する必要がある。

委員：いろんな知恵を出せば、できないことはないと思うので、人を呼ぶための一つの手法として、ぜひ考えてほしい。

委員：音が障害になるのであれば、何かほかに人を呼び込むアイデアがあればいいかもしれない。

委員：どういう風に数字を受け止めればいいのかというところで、事務局に対してだけではなく、委員の皆さんとも一緒に考えたいと思う。

例えば資料8ページに図書館の大きな機能である貸出冊数のデータがあるが、軒並み対前年度比で1割近く減っている。これはコロナの時に一旦落ちたわけだが、その後も大きな流れで見ると、どんどん減ってきているというのが実態である。それは図書館だけの問題ではなくて、私たちを取り巻く環境がそうさせているところもあるので、議題3の図書館評価にも関わってくるが、こういう数字をどのように見ていくのか。市立とか町立の図書館とは異なった役割や機能を持つ県立図書館なので、このあたりをどう考えたらよいか悩ましいところがある。それは利用者数についても同じだが、図書館の機能みたいなものの根本的なところで、先ほどの新サービスとも関連するかもしれないが、ホームページとかサイトを通じて人々を知識や情報へ導くことができているならば、それも図書館の機能として、個人の知的欲求を満たすという意味では大きな役割だと思うし、そういうことも評価の対象になってよいと思う。貸出冊数や入館者数などの数字だけにとらわれてしまうと、これから図書館を評価する指標がどんどんしぼんできて、必要性があるにもかかわらず、何かネガティブな評価を社会から受けてしまう。そうならないようにするための工夫が何かないと毎回思うのだが、いい知恵が出てこない。事務局としても悩んでいるところだと思うが、そのあたり委員の皆さん、何か良い知恵はないだろうか。先ほどはコンサートという、人を呼び込むためのツールについてのご提案があった。ボランティアというのも一つの切り口として、今回予算を獲得しているのだろうと思う。

委員：人を呼び込むツールということではないが、私の町では「アートフェスティバル」を毎年開催している。今月3日にそのプレイベントとして「サクラートフェス」という催しを開催し、香川大学の学生にワークショップをしてもらった。高松工芸高校の生徒にも来てもらい、「うどん県すごろく」というものを子どもたちと一緒に体験し非常に好評だった。県内には他にも大学があるし、高校もたくさんあって、ボランティア部みたいな活動をしているところがたく

さんあると思うので、今後もそういう学生を中心にワークショップなどを行えば、若い方も呼び込めていいのではないかと話した。

委員：たしかに大学も高校も地域と連携しながら探究を行うことに力を入れているから、そういう場を求めている。うまくマッチングができれば、いいものが生まれるかもしれない。

委員：ワークショップは大好評で、午前中で（用意した人数分が）終わってしまったブースもあるほどだった。

委員：県立図書館と高校や大学との連携の事例等があれば、少し紹介してほしい。

事務局：香川大学図書館との連携協定により、毎年、当館の展示コーナーで香川大学図書館が企画展示を開催している。令和5年度は初代学長の神原甚造氏の蔵書で構成する神原文庫にスポットを当てた展示を行った。また、一昨年農学部教授が監修した「アリの世界」という展示では、学生もボランティアとして参画して、展示の内容を考えたり、展示に関連しためくり式のクイズを作成したりした。

事務局：高校生との連携としては、多度津高校と連携する企画を調整しているところである。来年度は30周年でもあるので、できる限り一つひとつ課題をクリアして、この夏に実施したいと考えている。

委員：チャンスを見つけていろいろチャレンジすればいいと思う。

委員：県内にも個人作家がたくさんいると思う。私の町にも自分で絵本を出版した方がいるが、県内にはもっといるだろうから、そういう作家の作品展示をするのはどうか。

事務局：郷土資料や郷土人文庫として、自身が書いた本や絵本を寄贈してもらうことはあるが、それだけを展示する企画はこれまでなかった。良いアイデアだと思う。

委員：私が見せてもらった本は非常に凝っていて、原本は全部ちぎり絵で作ったもので、柔らかいタッチで好評である。高松とかにはそういう方がたくさんいると思う。大手の出版社ではなく個人で活動されている方の発表の場があればよいと思う。

委員：『うどんやのたあちゃん』という絵本はここにあるか。

事務局：所蔵している。

委員：あの本の作者は香川県の方である。今の意見はすごくいいと思う。ミニ展示でもよいので実施すればよいと思う。

委員：地元では個人で展示などをしているが、もう少し大きく取り上げられたらいいなと思う。ほかにも個人作家がいると思うので、いろいろな作品が集まればよい。

委員：こども読書通帳は何歳までの子どもを対象に発行するのか。

事務局：特に年齢は決まっていないが、当初のコンセプトとしては、3色ある通帳のうち2冊は小学生向けでかな書き、1冊は中学生向けで漢字を使っているという違いがある。

委員：高校生でも希望すればもらえるのか。

事務局：大人でも我が子に読んだ本を記録するためと言われれば、差し上げている。ただ、子どもが自分で記入するという前提で、ひらがな表記のものと漢字表記のものを作った。

委員：（読書通帳を最後まで記入した人に贈る）しおりの配付枚数は48枚であまり多くない。

事務局：読書通帳を図書館に持って来てくれた方に配っているのだから、持ってこない方もたくさんいると思う。

委員：先ほど話題に出た「探究」は良い学習活動だが、まだ試行錯誤していて生徒も何をすればよいのか迷っている。図書館と学校とのタイアップができるなら、好きな子はちょっと行ってみようかなと思うかもしれない。

委員：どういうゴールが見通せるかだ。県立図書館がそこにどう関わっていくのかという見通しが立てば、やれそうな感じがする。

委員：今は1人1台タブレットがあるので、子どもたちは探究活動になるとすぐにタブレットで調べてしまう。「もう少し出かけたり、本に当たったりすれば、いいものになるよ」と言っているのだが。

議題(3)図書館評価について

委員：資料25ページの「利用者の居住地」には県外の方もいる。県立図書館であっても、県外の方でも入館できると思うが、本の貸出しはできるのか。

事務局：資料貸出のための利用登録の要件は、香川県内に居住の方、或いは県内の企業や学校に通勤通学されている方ということだが、交流人口を増やすという県の施策もあり、例えば一定期間研修等で本県に来るビジネスマンの方とか、家族の介護や自身の病気療養のために県内に来て一定期間滞在される方については、利用登録が可能である。

委員：評価指標に今回新たに追加した「⑤新規登録者数に占めるオンライン新規登録者数の割合」は、スタートから3か月間の実績として既に7.51パーセントあるのに、来年度の目標がそのまま7.5パーセントである。先ほどのイベント開催の議論とも関連するが、図書館として今後どういう年代の方を増やそうとしているのか。例えばオンライン申請できるような若い方をターゲットに来年度は取り組んでいこうということをお願いするのであれば、オンライン新規登録者数の割合はもう少し高い数値を置いてもいいのかなと思った。この統計を見ると、今は高齢の方が多くなっているんで、そういう方向けのサービスを今後も提供していくという方針であれば、現状の7.5パーセントというところになるのかなということで、このあたりの方針を引き継ぐことと、この数値との関連を知りたい。

事務局：オンライン登録は12月から始めてまだ3か月だが、幸いにもある程度周知も奏功して、問合せとか注目度も比較的高かったと思っている。その状態で7.5パーセントの実績があったので、出足としていいほうだろうという感覚を持っており、その良い数値を続けたいというのが狙いである。何パーセントが適切かというのは難しいが、そういう考えで設定した数値である。

また、年齢層に関しては、特定の年齢層をターゲットにするという考えは特になくて、図書館だから、全年齢層が対象になるので、その意識はあまりなかった。

委員：関連する質問だが、デジタル社会への移行、つまりDXとか言われる中で、これからはもうオンライン登録をしてもらうというのが社会の流れだと思うが、その中で、オンライン登録者の割合が7.5パーセントという設定はどうなのかなと思う。たとえ現状がそうだとした場合、そんな時代ではないと思うが、そこは協議したうえで数値を決めたのか。

事務局：導入する前に、どの程度オンライン申請にシフトするのかということで、先行事例として愛知県図書館に尋ねたところ、人口規模は違うが、新規登録者数に占めるオンライン登録者の

割合は8パーセントという回答だった。そういうことも参考にして、この7.5パーセントという数値を置いた。

委員：初年度なので、何年か様子を見てみるという考えか。

事務局：新規利用者登録は、本を借りる時に必要になるものなので、図書館に足を運んだついでに登録する方が多いのが現状であり、オンラインで先に登録しておいてから借りに行こうという方は少ない。現状では、本を探しに来館し、借りたい本があった、カードがないので作るという流れになっている。オンラインでできることと図書館のアナログ的な部分をどうミックスしていくのが課題だと思っている。

委員：資料28ページの質問5「他の図書館ではなく、県立図書館に来館した理由について」に対し、一番多い回答は「近所だから」、次が「駐車場が無料だから」となっている。「利用したい資料がたくさんあるから」という回答もあるので、そのあたりは違うのかもしれないが、県の図書館が果たすべき役割とは一体何なのか。こうだから県立図書館に行こうということがもっとあってもよいと思う。そのためには県立図書館がそれをはっきりとアピールしなければならない。

事務局：この質問に対し我々が期待していた答えは、県立図書館が持っている資料が目的で、県立は信頼できる図書館だから来るということだったが、結果を見ると、これが利用者の本音だと思う。我々としては利用者の期待に応えるべく資料を整備し利用者サービスの質を向上させることに尽きるのではないかと思う。

委員：利用者の層により、この結果は変わってくると思う。お年寄りの方などは近いから来ようかという人が多いかもしれないが、勉強とか学問をする層は資料が多いということでも来るかもしれない。層別に見れば違う結果が出るのではないか。

委員：だから評価が難しい。レアな本を手に入れたいなら、たぶん市よりも県の図書館のほうが可能性がある。しかし、レアな本はほとんど誰も利用しない。そういう意味で、たくさん借りてもらったから良いとか、たくさん人が来たから良いとかではなく、県の図書館の役割には大事なものがほかにあるのかもしれない。

委員：逆に県立だからできないこともあるのかなと思っていて、普通の図書館であれば、例えば「赤ちゃんタイム」といって、ママが声を出して本を読み聞かせてもよい時間を設けているという記事があった。そんなことは県立図書館では難しいと思うので、地域の図書館のほうがいろいろ行事がしやすいというところもある。

委員：県立図書館の役割という意味では、評価指標の中に「県内公共図書館職員向け研修満足度」があったが、市町の図書館職員の研修を一括して行うのは県立の役割なので、これが指標に加わったのは非常に良いと思う。

また、評価指標に重みを付けてもいいのではないかと思う。16のうち重要視する指標と他の都道府県立図書館と比較するために採用している指標を分ければ、香川県立図書館として何を目指しているか、力を入れているかということが分かる気がするが、今回、指標を見直したこと自体はすごく前進していると思う。

(利用者の県立図書館に対する愛着や他者へのおすすめ度合を示す) NPSは、(初めて調査した) 昨年度の21.1ポイントから今年度は24.0ポイントに上昇している。通常2回目の調査結果は数値が10ポイント台に下がってもおかしくないのに、良い数字である。